

福祉国家の変容と「成熟」

大人になることのむずかしい社会と教育

荻谷剛彦 東京大学大学院教育学研究科

「キ:このマークが付してある著作物は、第三者が有する著作物ですので、同著作物の再使用、同著作物の二次的著作物の創作等については、著作権者より直接使用許諾を得る必要があります。」

成熟社会のパラドクス

- 社会が成熟すればするほど、個人にとっての成熟がむずかしくなる
- 個人の成長・発達（「大人」になるための準備）のために誕生した（学校）教育が拡大・発展すればするほど、個人の成長・発達（「大人」になること）がむずかしくなる
- なぜこのようなパラドクス（逆説）が生じたのか？何が生じているのか？

経済ナショナリズムの時代

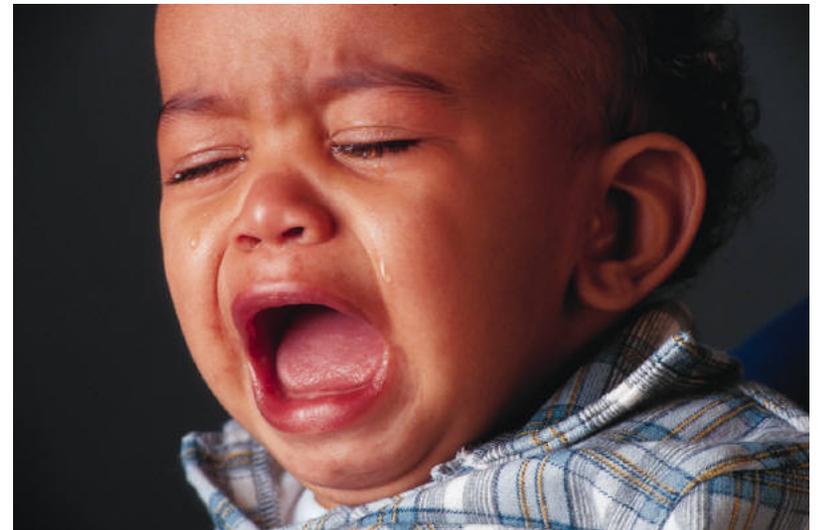
- 一国の経済の成長が、国民の豊かさ≡幸福の拡大をもたらす
- 完全雇用の実現をめざす
- 「福祉国家」の成立と富の再配分
- 教育拡大（福祉・投資としての教育）
- 経済・社会の成長・発展・開発（development）と個人の成長・発達（development）の予定調和が前提とされていた

「教育」「学校」の役割

- 「教育」は子どもが大人になるまでの過程に関わる社会的な営み
- 知識・技術の伝達、「個人」の全面発達＝自立をたすける営み（「人格の完成」）
- 「誰でもないが誰にでもなれる」存在としての子どもを「誰か」にしていく過程（森重雄「学校の空間性と神話性」1998）
 - 「何にでもなれる＜自分＞」の自己実現をたすける営み
- 平等と自由と個人の発達に関わる公教育

何にでもなれる 誰でもない人

- 生まれたばかりの赤ん坊
- 何になるか。
- 何になれるか。
- 誰にでもチャンスを与える
- それを理想に教育は拡大



グローバル化と経済ナショナリズム・福祉国家の行き詰まり

- 福祉国家の行き詰まりと employability
完全雇用の保障から十全な雇用能力の育成へ
- 「知識社会・経済」もとでのグローバルな競争の激化
- 規制緩和と自己責任
- 進展する「個人化」と拡大する格差
- 自己実現の大衆化（「大衆自己実現社会」）

「個人化」 (多元主義化・個性主義化) が進む社会

“Do-it-yourself-biography” 自分で作る一代記 (自伝) が礼賛される社会(Beck)

- 人生は選び取るもの：選択の連続←伝統社会との差異
- 職業生活を通じた「自己実現」
- 進路指導の理想：「自己理解」を通じ、「自分らしさ」を発揮できる仕事を通じ、「自己実現」できる進路を「自分」で選ぶ＝「何にでもなれる<自分>」の自己実現をたすける教育

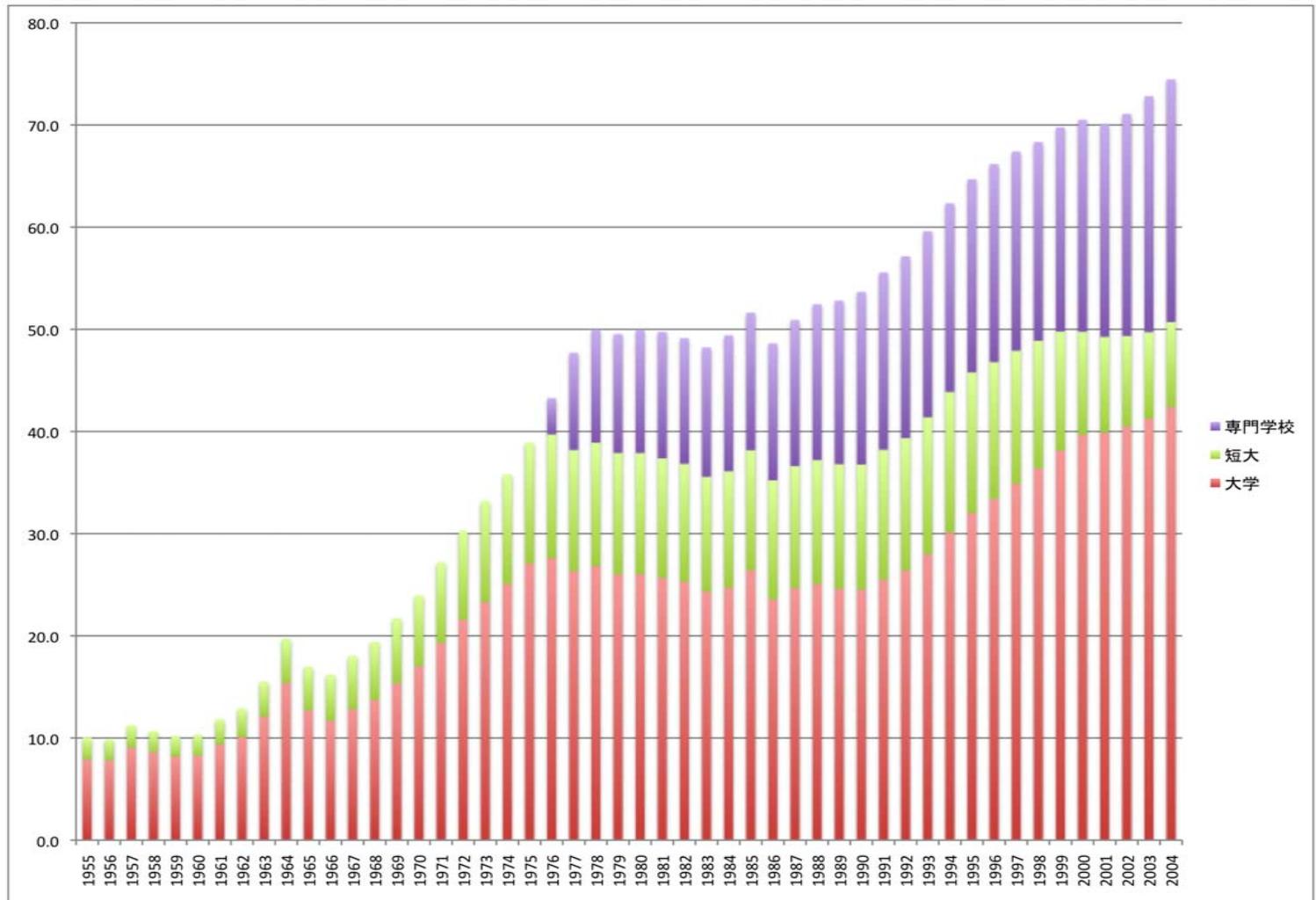
大人になることの意味：反抗を通じた成熟というルート（の喪失）

著作権処理の都合で、この場所に挿入されていた
文章は削除されました。

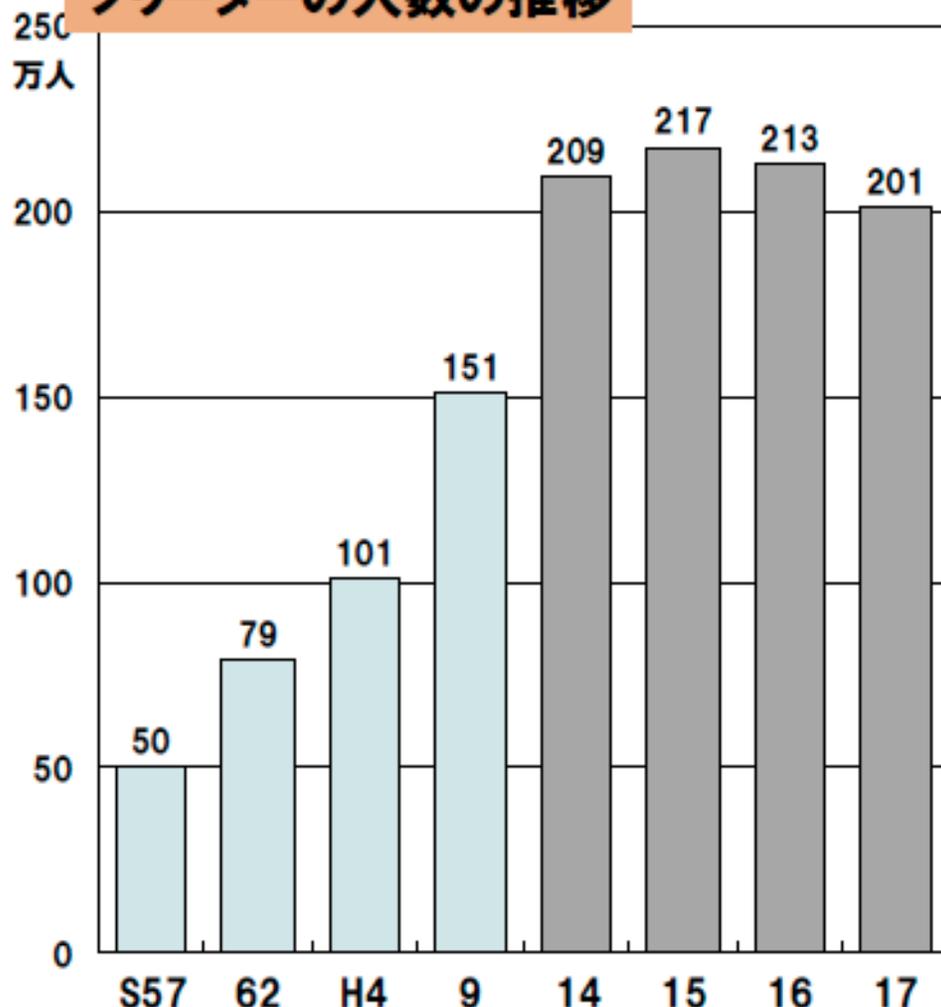
労働を介した成熟（の喪失）

著作権処理の都合で、この場所に挿入されていた
文章は削除されました。

高等教育進学率の推移

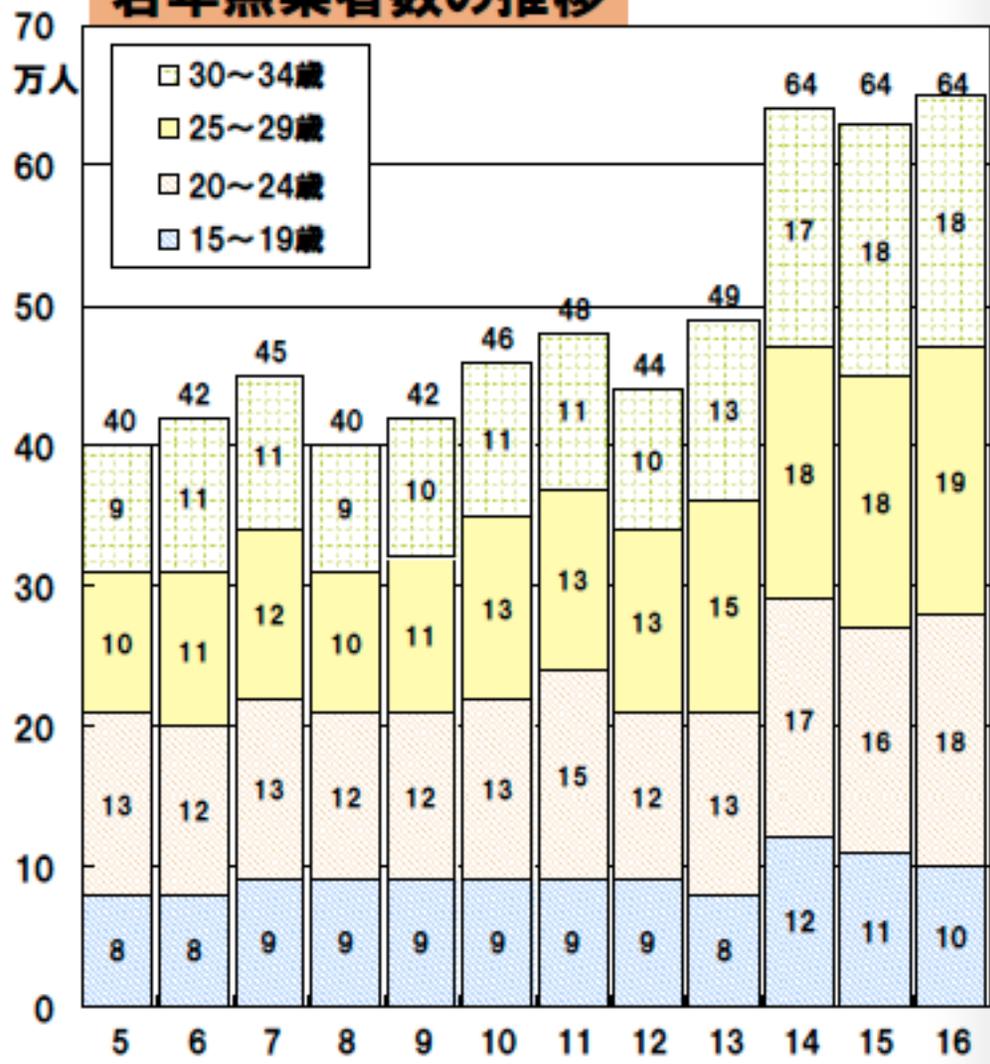


フリーターの人数の推移



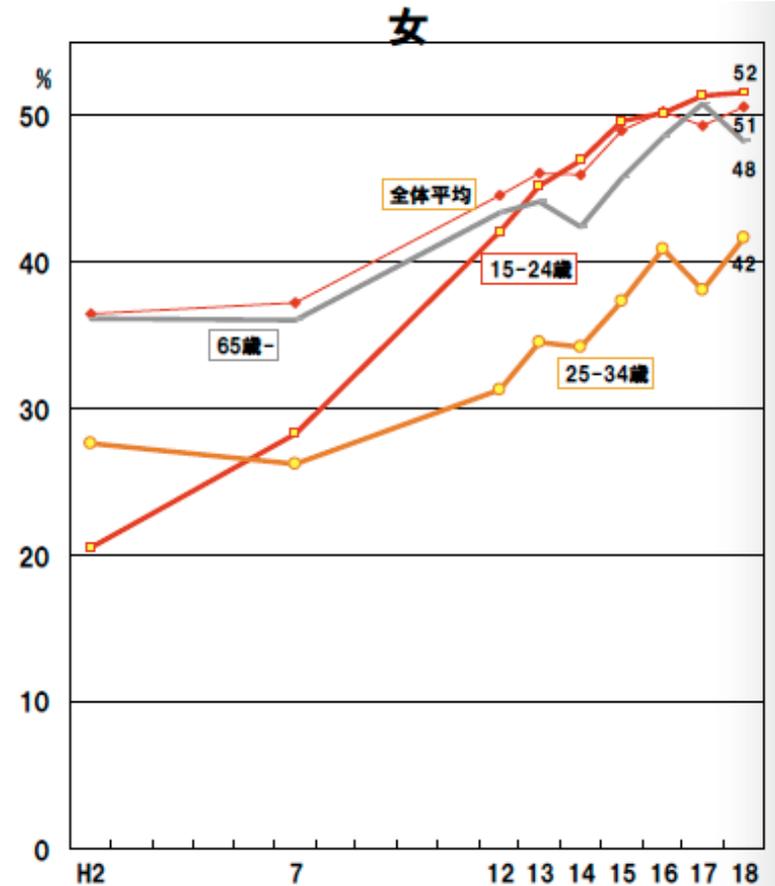
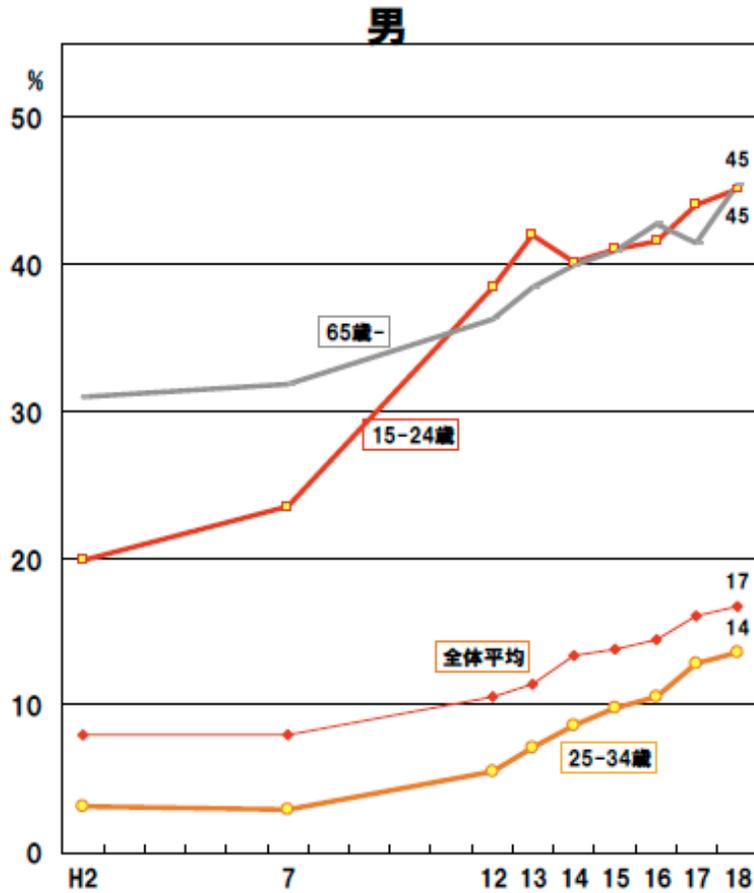
総務省統計局「就業構造基本調査」(昭和57年～平成9年)、「労働力調査(詳細結果)」(平成14～17年)を厚生労働省労働政策担当専ら官室にて特別集計
「フリーターは、年齢15～34歳、卒業生であって、女性については未婚の者とし、さらに①現在就業している者については勤め先における呼称が「アルバイト」「パート」である雇用者で、②現在無業の者については家事も進学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事希望する者
昭和57年から平成9年までの数値と、平成9年から17年までの数値とは、フリーターの定義等が異なるため接続しない点に留意。

若年無業者数の推移



総務省統計局「労働力調査」
 若年無業者について、年齢を15-34歳に限定し、非労働力人口のうち通学も
 家事もしていない者として集計

非正規雇用の割合



† 総務省統計局「労働力調査」

おわりに：

自己実現アノミーと格差問題

- 自己実現アノミー＝共有されるゴール（大衆化した自己実現）に対し、それを達成する手段や機会が十分に与えられていない状態
- 経済的基盤の浸食（ワーキングプア）
- 「インセンティブ・ディバイド」（「やりの格差」（荻谷））
+ 「やりの搾取」（本田由紀）
- 少子化、未婚化、家族の変容
- 次世代への格差の継承
- 「成熟」社会の生きにくさと学校の限界